

ところが2001年4月エストラダが不正金の着服で告発され、逮捕されると、親エストラダ派の貧しい民衆たちがEDSA大聖堂を占拠する大規模なデモが起きた。民衆はこのデモをEDSA3と呼び、民衆が支持する大統領を豊かな者たちが踏みにじった不当に対する正義であると主張した。宮脇は、このEDSA3によって、「貧しい者たちの教会」を実践してこなかった教会の矛盾が露呈されたとして鋭く指摘する。

終章の第7章「『公共宗教』の模索」は、各章をまとめつつ、カトリック教会が、ソトとウチ、「公共」の垣根をあいまいにしながら、さらに市民社会と半ば同化しつつも超越的指導者として政治に関与してきた事実を、フィリピンにおける「公共宗教」の特徴として結論づけている。

CBCPが刊行した膨大な一次資料を扱いながら、フィリピンのカトリック教会の特徴を体系的に論じた本書は、質と量の双方の点で、国内だけでなくフィリピンをはじめ海外で刊行された学術書であつても比肩するものはない。この点で本書は、フィリピン・カトリック研究の今後の展開において、必ず参照されるインパクトを備えている。とりわけ評者は、カトリック教会の矛盾を鋭く突いた第5章と第6章から多くの示唆を受けた。

宗教社会学の門外漢を承知の上で気になった点を一点挙げるとすれば、副題にある監督という用語について、宮脇がどのような意図を込めているのか、やや分かりづらいことである。本書が明らかにした事例に基づくならば、教会は国民を監督できているとも言えるし、まだできていないとも言える。さらに要理教育において、「フィリピンにおける教会のあるべき姿」が明確に提示されていない以上、監督者として教会がフィリピンをどう導こうとしているのか、あいまいなままのはずである。もちろん宮脇が終章で示しているように、「公共宗教」として教会がどのような模索をしているのか、2000年代から現在にいたる大統領に対する政治関与から窺うことができる。そうであるならばなおのこと、「公共宗教の模索」、あるいは「公共宗教の矛盾」と表現する方が適切ではないだろうか。

とはいえ民主化や解放運動といった近代化を経

た後、教会が国民をどう導こうとしているのか明確でないのは、おそらくフィリピンに限られることではない。「公共宗教」を論じたカサノヴァは、西洋近代の行き詰まり、傲慢さ、そして凋落という不確かな世界に生きる私たちにとって、宗教を世俗化や「公」と「私」の二元論という視点から分析するだけでは不十分であると主張する。さらには行き詰まった近代が自らを近代から救うことに、宗教は意図せず手助けするかもしれないという期待すら込めている。近代という監督者を失った私たちにとって、宗教は私たちを導く最後の砦なのかもしれない。

(芹澤隆道・京都大学人文科学研究所研究員)

参考文献

Casanova, Jose. 1994. *Public Religions in the Modern World*. Chicago: University of Chicago Press.

小泉順子 (編). 『歴史の生成——叙述と沈黙のヒストリオグラフィ』 京都大学学術出版会, 2018, 5+334p.

はじめに

本書は歴史が編纂される過程におけるメタナラティブ（「大きな物語」）に着目したものである。歴史上の諸「事実」から何がどのように選ばれ、いかに「叙述」され「大きな物語」の形成に寄与したのか、一方で、そこから何が見落とされ、ときに排除され「沈黙」を余儀なくさせられてきたのか。そのことについて、東南アジア史の範囲に限定し、8人の著者が各論考を通じ批判的にあぶり出している。

歴史学におけるメタナラティブとは、本書序文の脚注4に紹介されているApplebyほか（1994）の定義に従えば、「歴史の解釈と記述を有機的に編成するためのより高位の認知の枠組み」（p. 7）のことを指す。新興独立国家の多い東南アジアでは、とりわけ独立闘争を軸とした国民国家形成の「物語」がメタナラティブとなりやすく、研究者もそこから自由になることは容易ではなかった。

本書で展開される議論は、その基盤を今世紀初

頭に実施された2つの共同研究に拠っている。ひとつは東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で2000-1年度におこなわれた「前近代東南アジアの『古典の物語』と歴史認識」(研究代表者: 青山亨)であり、もうひとつは本書の編者が代表となった科研基盤研究B(2001-3年度)「東南アジア史のメタナラティブをめぐる総合的研究——国民国家の物語・ジェンダー・近代」である。このことからわかるように、本書の各論考は東南アジアの特定国民国家における歴史叙述と歴史認識に留意したうえで、国民国家の「物語」、ジェンダー(特に女性の立ち位置)、そして植民地支配や近代化の過程がもたらした近代知の受容のされ方のいずれかに着目し、もしくはそれらの複合を意識して議論を展開している。換言すれば、各国の標準歴史書や先行研究に示されてきたこれまでの歴史叙述を、一次史料の再読み込みによって客体化ないしは「解体」し、メタナラティブの生成過程の特徴について論じているといってもよい。

構成と内容

編者は序文で本書の課題を次のようにまとめている。19世紀末以降に東南アジアに近代歴史学が導入されて以降、新しい出版技術に基づく歴史書や史料の刊行がすすみ、国民国家形成の動き(独立運動や独立後の国民統合過程)と並行して国民史の構築が模索されるようになると、その時代を対象に、ある特定の歴史像や歴史の語りが生成され、継承されるようになった。一方で、背後にある「語られざる前提」や、「看過されたテーマ」や史料および議論の枠組みが存在する。それらを時代の文脈と権力の作用に着目して明らかにする必要がある、「半世紀の間に長足の進歩を遂げた東南アジア史研究を積極的に受けとめながら、研究自体の位置づけを考える視座から史料と研究史に向き合おうとする試み」(p. 6)が本書の目的であると記している。上述のメタナラティブの議論と東南アジア史研究の研究史を扱った代表的な先行研究をいくつかひもときながら、最終的に「歴史の理解や解釈は特定の政治的要請のもとになされることを自覚し、その帰結を考えつつ、『史実』の発掘に努め続ける必要性」(p. 11)があることを強調

している。

こうした編者の問題意識を軸に本論では8論考が配置されている。はじめの3章は歴史の編纂と英雄の問題を検討したものである。第1章「国家・英雄・ジェンダー——カルティニ像の変遷」(小林寧子)は、過去100年ほどの間にオランダ、インドネシア、日本で叙述されてきたカルティニのイメージの生成過程と変遷について、時代の文脈や時の権力との関係に留意して新たな分析をおこなうとともに、富永泰代の博士論文(2011)を活用して、これまで重視されてきたカルティニ書簡集の政治性を解明している。また、スハルト政権が押し付けた官製のカルティニ像は、同政権瓦解後に変化を見せ、彼女の生き方や弱者への慈しみの姿勢への共感が国民の間で定着するようになったことが示唆されている。第2章「ベトナムのナショナルヒストリーと女性史——抗米戦争期の歴史叙述」(片山須美子)は、抗米戦争期の時代において、唯物史観による発展段階論よりも民族解放闘争史観が強調され、「雄王伝説」など父系的な物語を核にしたベトナムのナショナルヒストリーが主張されたことを明らかにし、そのうえで、それを攪乱ないしは補完するベトナム女性史の叙述を分析し、両者の相互関係について論じている。第3章「植民地史の換骨奪胎——イブラヒム・ハジ・ヤーコブとマレー史の再構築」(左右田直規)は、「大マレー・インドネシア国家構想」をとりあげ、英領マレー期に構想されながらも実現することのなかったこの運動を指導したイブラヒム・ハジ・ヤーコブの歴史認識に焦点を合わせ、共同体・空間・時間という3つの概念を示しながら、植民地(史)学との関連を掘り起こしている。ヤーコブが人種や地理的空間認識では植民地史の枠組みを取り入れながらも、独自の民族史理解に基づくマレー史を叙述したがために、結果的に現代マレーシアの「英雄」としては逸脱者とみなされるに至った経緯が論じられている。

続く第4章から6章までは、近代における二項対立的な認識枠組みやジャンルの生成が東南アジア各国の歴史叙述に組み込まれていく過程と、そこから削られたりこぼれ落ちたりしたナラティブに注目した議論が展開される。第4章「『近代』を

めぐるメタナラティブ——ビルマにおける『民族医学』の確立をめぐる」(土佐桂子)は、「知識を統合し、伝授する際に働く営為にこそ、『近代』と特徴づけられる再帰性が存在する」(p. 159)のではないかという問いに基づき、19世紀末から20世紀初頭にかけて英領ビルマで生じた農民反乱における民間医療と、その背後にある宗教実践についてとりあげ、そこに示されるナラティブを検討している。とりわけ、植民地権力から正統な「伝統医学」として認められるためのプロセス確立過程において、「呪術」とみなされたがゆえに「伝統」に加えてもらえなかった「パヨーガ」による治療方法と語られ方の変化に注目した点に特徴がある。第5章「古典『文学』というナラティブ——ビルマ語仏教散文『ヤタワッダナウットゥ』が『文学』になるまで」(原田正美)は、近代以降のビルマにおいて、宗教と文学が別々のジャンルに分かれたことに着目し、そのことの自明性を問い直している。特に20世紀への変わり目の時期において、『称誉増大物語』という仏教散文が「文学」とみなされていく語りの成立過程を検討することによって、植民地知の影響と独立後の政治権力による新たなビルマ知の再編に光をあてている。第6章「出版とオランダ領東インドのイスラーム化——インドネシア近代史叙述とイスラーム・アイデンティティ」(菅原由美)は、「国民」形成史の研究に力点が置かれてきたインドネシア史研究において、軽視されてきたイスラームの影響に注目する。19世紀中葉にイスラームに関する知識が、一部の宗教エリート(寄宿塾世界)から一般のムスリム社会へ広がりを見せるようになった経緯を、キタープ(イスラームのテキスト群)の写本が出版物となって書店で販売されるようになったことを軸に論じ、インドネシアが宗教を存立原理としない国民国家として誕生したことを強調する国史が成立する一方で、一般社会に染み込んだイスラームがジャワを中心に社会内部の対立構造を深刻化させた一面を論証している。

最後の2章では「人種」「民族」「奴隷」など「人をめぐるカテゴリー」の成立過程の批判的再検討をおこなっている。第7章「自由と不自由の境界——シャムにおける『奴隷』と『奴隷』制度の廃止」

(小泉順子)は、チュラロンコーン王による「タート」(債務「奴隷」)の制度廃止過程に着目し、「奴隷」廃止を一連のチャクリー改革の人道的成果として評価する公定史観(王朝側の史観)の成立過程を分析し、「タート」と「雇い人」という二項対立の枠組みでは理解しきれない複雑な背景の解明と、それが継承された要因を論じている。第8章「前近代社会の『民族』——エーヤーワディー流域コンバウン王国のカレン」(伊東利勝)は、ビルマ史叙述において自明の「民族」として描かれるカレンを具体例に、「民族」を所与の政治単位として描く歴史叙述の成立過程を示すことによって、そうした叙述の徹底的な相対化を試みている。王朝側がカレンをひとつのまとまりある「民族」とは認識していなかったこと、植民地知としての民族学、言語学、統計学などの影響とナショナリズムの登場が並走し、エスニック・グループが基本的政治集団として認識されるようになったこと、その結果、多数派「民族」としてのビルマ人と少数「民族」諸集団という枠組みが成立し、両者の緊張関係として歴史が叙述されるようになったことを明らかにしている。

評価と課題

本書は問題設定の一貫性が見られる密度の濃い共同論考集だといえる。人文系の共同研究の中には、編者の問題設定が優れていても、それが各著者の論考に必ずしも反映されていない事例をみかける。本書はその点で両者の間に齟齬が見られず、「はじめに」で示された問題設定に基づき、主に3つのテーマに基づいて8つの論考を適正配置した編者の力量は高く評価できる。各論考の質も一定しており、現地語の一次史料をしっかりと読み込んでいる点は無論のこと(21世紀以降の現地語軽視の地域研究の流れとは逆)、先行研究への批判的視座の確立も明確で、今後の東南アジア各国の歴史研究を推し進めるにあたって、これまでの叙述の枠組みでは不十分であることだけでなく、従来のメタナラティブから「解放」された新たな「問い」の設定が求められていることが強く伝わってくる著書である。日本の東南アジア史研究のひとつの記念碑となる学術書だといってよい。やや穿った

見方をすれば、8人の著者がいわゆる史学科（特に東洋史学）出身ではない地域研究者だからこそ、このような歴史生成の根幹をめぐる議論に、自らのフィールドと現地語史料を読み解く能力を生かした知的自由さを持って参加できたのではないかと想像される。

一方で課題も見られる。最後に編者自身による暫定的な「答え」を示す結論的な章があってもよかったのではないかと。読者が各論考から「答え」を導き出すことは十分可能であるが、序文の「問いかけ」とセットで本書全体の「解答」が最後に組まれていれば、いっそう深みのある学術書となったであろう。また、とりあげられている東南アジア国家が5つに限られ（ビルマ3、インドネシア2、マレーシア・ベトナム・タイ各1）、フィリピン、カンボジア、ラオス、シンガポール、ブルネイ、東ティモールが抜けていることが気になる。無論、すべてを取り上げることは困難であろうが、フィリピンとカンボジアについては歴史研究の蓄積も多く、両国の歴史における「叙述」と「沈黙」の様相は検討の価値が十分にあるのではないかと。また、議論が東南アジア5カ国それぞれの「国民史」形成に限定されているため、東南アジア各国間の「横のつながり」が、メタナラティブ形成ないしはそこから落とされた要素にどのような影響を与えたのかを読み取りにくいことも指摘できる。このほか、各章には内容には影響を与えないレベルの小さな表現上の問題が見られる。ひとつだけ指摘すれば、第5章（原田論考）における仏教用語の説明抜きの多使用である。東南アジア史の学術書とはいえ、仏教学の専門から遠い読者に対しては少々不親切であろう。

最後に、本書が副題にあえて東南アジアという地域名称を含めなかったことの英断を評価したい。目次を見れば東南アジア史研究の学術書であることは明白だが、議論の鍵である歴史編纂における「叙述」と「沈黙」の問題を徹底的に議論すると何が見えてくるのか、そのことを編者が「問い」として最も強調したかったことが副題から伝わってくる。読み終わってからもそれがいっそう納得できる。今後、この「問い」に基づく議論の深化を期待してやまない。

（根本 敬・上智大学総合グローバル学部）

加治佐 敬、『経済発展における共同体・国家・市場——アジア農村の近代化にみる役割の変化』日本評論社、2020、vi+296p.

正統派経済学はホモ・エコノミクスと競争的市場の仮説を基礎に構築されてきたが、1980年代以降、発展途上国では、これらの仮説で説明不可能な事例が数多く観察され、途上国経済の仕組みを理解するには、経済活動における人々の社会的選好やネットワークの役割、情報の非対称性・外部性に起因する“市場の失敗”を考慮に入れることが不可欠であることが強く認識されるようになってきた。

競争的市場は、不確実性、情報の非対称性、外部性の存在などの要因により、しばしば、効率的な資源配分に失敗するし、効率的資源配分が達成されたとしても公平な分配が保証されるわけではない。共同体や国家は、この市場の失敗を補完する役割を果たす機能を持つと考えられている。

本書は、このような考え方を基礎に、農村における農業用水の村落による共同体の水利慣行と労働市場における共同体的雇用慣行を取り上げ、伝統的な共同体的慣行の役割、経済発展により劣化する共同体の機能を補完する市場や国家の役割について、近年の経済学の新しい潮流を踏まえ考察したものである。

1. 本書の概要

本書は、“まえがき”に当たる序章と“結論”にあたる終章、灌漑施設の共同体的管理を扱った第1章から第5章、および、労働市場における共同体的ネットワークの役割に着目した第6章、第7章から構成される。

以下ではまず、第1章から第7章の内容を簡単に紹介する。

第1章では、共同体という概念を「主として地縁・血縁で結ばれた集団であり、ゆえに集団内の交流が濃密でお互いに関してよく知っており、現在の関係が永続する前提で行動する人々によって